世界と日本の温泉地の現状とあり方

千葉大学教授
山　村　順　次

Present Condition and Prospect of Spa Resorts in the World

Junji YAMAMURA
Professor of Chiba University

1．はじめに

日本は世界的にみて温泉利用が最も盛んな国であるといっても過言ではない．しかし，その利用形態は楽しみのための温泉入浴に特色があり，ヨーロッパ諸国において温泉の医療的利用が主流であるのとは好対照をなす．もちろん，日本でも第2次世界大戦前には多くの温泉地が湯治場として強く機能していたものの，戦後の高度経済成長期を経て一気に宴会型の歓楽地へと変質したのであった．そして，低成長期から安定成長期へと移行し，高齢化社会を迎えて健康志向が高まっている今日，温泉の保養的意義が再認識されつつあるのである．

一方，アメリカ合衆国やニュージーランドなどでは，温泉は現在レクリエーションやリフレッシュのために利用されているところが多く，韓国，台湾では日本に類似した性格を示している．

そこで，今後の日本の温泉地のあり方を考えるに際して，欧米諸国の温泉利用，温泉地の整備などから学ぶ点があれば，これを参考として積極的に取り込んで保養温泉地づくりを進める必要があろう．かかる視点にたって，以下にヨーロッパとアメリカ合衆国における若干の温泉地の現状を記し，さらに日本の温泉地の現状を踏まえて，そのあり方を考察することにしたい．

2．ヨーロッパの温泉地

(1) ドイツのバーデン・バーデン

ヨーロッパを代表する保養温泉地のバーデン・バーデンはドイツ南西部，ライン川上流右岸のシュバルツバルト(黒い森)の谷間に位置している．紀元1～3世紀にこの地を支配したローマ人が温泉浴場をつくったが，その後温泉場は衰退し，1806年新興バーデン公国の初代大公カール・フリードリヒが復興して今日の基礎を築いた．著名な建築家ワインブレンナーは1820年代初頭に広大なクアパーク内にクアハウス，カジノ，飲泉場などの豪華な建物を設計し，国際競馬大会が催されたり，王侯貴族や音楽家，文人達も各国から集り，国際的な上流社会の場が成立した．事実，宿泊者数は1820年の5,138人が1850年には33,623人へと急増した．

その後，1870年にフランスとの戦いで温泉場が衰徹した際に，行政当局は温泉保養局を設立して従来の華やかな社交の場から温泉療養，保養の場へと方向転換を図った．この時にヨーロッパで最もモダンであるといわれたフリードリヒス浴場をはじめ，アウグスタ浴場(現在のカラカラ浴場)，蒸気吸入施設などの温泉施設が新設された．

第2次世界大戦後もカジノ収入の多くが温泉施設や地域環境の整備，イベントの運営などに投じられて保養温泉地として充実し，バーデン・バーデンは現在ヨーロッパ随一ともいえる程の温泉集落をなすに至っている．温泉は地下200mから湧出する食塩泉で，市と州当局が所有している．温度は53℃～68℃とかなり高く，1日に80万lの湧出量あり，特にリウマチ，神経痛に効果あるといわれ，リウマチ病院も設置されている．

ドイツでは，これまでは約4分の3の温泉療養客が健康保険の適用を受けて安い経費で温泉療養，保養を行ってきた．しかし近年では財政難もあってその適用が厳しくなり，バーデン・バーデンでも短期滞在の一般観光客の誘致にも力を入れるようになった．アウグスタ浴場も約30億円をかけて大改造され，古代の歴史に因んだカラカラ浴場として新しい観光対象となっている．

1986年の資料によると，カラカラ浴場の入浴料を組み込んだ格安の宿泊セットが売り出されており，朝食付で入湯税，入浴料1回分，特別サービス10ポイント分(市内ツアー5ポイント，ケーブルカー2，カジノ入場1，飲泉4，コンサート2など)込みの週末2泊3日コースで，料金はエコノミーホテル利用の場合の7,500円から高級ホテルの20,000円までであり，6泊7日コースでは入浴料3日分，特別サービス30ポイント付で25,000円～68,000円となっている．

バーデン・バーデンにはホテル，ペンションが50軒，家具付ホテル21軒，アパートメントホテル57軒，部屋貸し民宿が14軒あり，1泊朝食付で2,400円から16,000円までの多様な宿泊料金が設定されていて，客の好みに応じている．宿泊客数をみると，1950年では客数65,000人，延数207,000人であったが，1983年にはそれぞれ184,000人(うち外国人は40%)，670,000人となり，大幅な増加をみている．平均滞在日数は1970年にはドイツ人6.9日，外国人2.6日であったが，1983年には外国人は大差はないもののドイツ人は4.6泊へと減少している．しかし，延宿泊客数の約20%は純湯治客で占められており，彼等は相変わらず2週間から1カ月間の長期滞在をしていて，温泉療養を続けているのである．

(2) オーストリアのバート・ホフガスタイン

オーストリアには50カ所の温泉地があり，1983年に約1,150万人の延宿泊客数を示した．オーストリアでもドイツ同様，温泉療養には健康保険が適用されるが，1978年の政府資料によると1週間以上滞在の温泉療養客は194,000人で，そのうち全額保険適用者は57.2%，一部補助は17.6%であり，全額私費の客も24.6%程あった．そして，年金生活者が40.2%を占め，主婦，工員，従業員なども多く，男女とも50歳以上が70%を越えている．

ザルツブルクの南90kmにあるバート・ホフガスタインはオーストリア最大の延宿泊客数130万人(1983年)を数える．この地はかつて金銀の鉱山町であったが，その衰退後の第2次世界大戦前，近くのバートガスタインより1日に100万lの温泉を引湯して新しい温泉集落を形成した．この温泉は慢性リウマチに効能があるといわれ，また呼吸器疾患やストレス解消，リハビリテーションにも利用されている．

バート・ホフガスタインでは，広大な温泉保養公園(クアパーク)の中に温泉治療館(クアミッテルハウス)，温泉保養館(クアハウス)が計画的に配置され，アイススケート場や池が併設されているし，公園に接しては温泉付の有力ホテルが立地し，飲泉場，教会，広場を持つ温泉場の町並みが形成されていて，一帯は歩行者天国として入湯客に解放されている(図1)．その北側や西

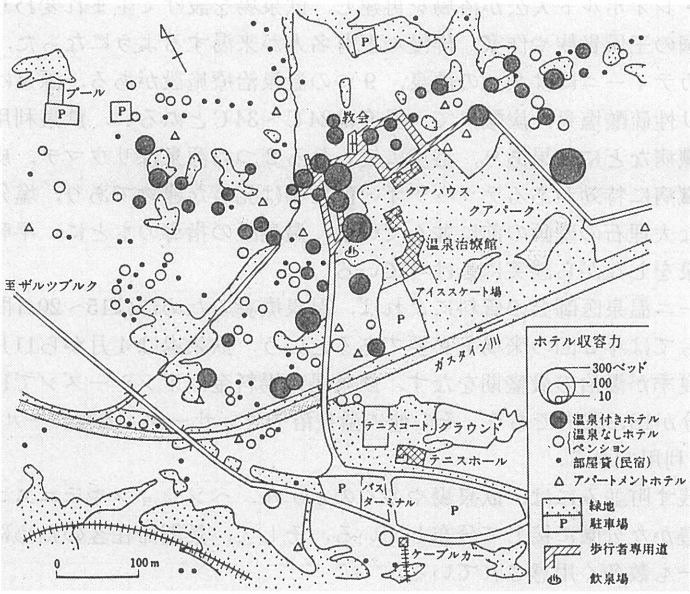

図1　バート・ホフガスタインの保養温泉集落
(注)バート・ホフガスタイン観光協会の資料により作成．1983年現在．

側の平坦地には，温泉のない中小ホテルや部屋貸しの農家民宿が多数分散立地している．さらに，温泉集落の外縁部に温泉プール，テニスコート，グラウンドなどが整備され，広い駐車場が各所に配置されていて，快適な温泉地環境が保たれているのである．

集落背後のアルプス北麓の斜面は，冬には一面のスキー場に変わる．1958年にスキー世界選手権大会が行われて以後，ガスタイン谷全域にわたって50を越えるリフトが総延長50kmにわたって整備され，リフトの1時間当たり輸送人員は5万人にも及んでいる．標高800～1,600mの林地には90kmに達するクロスカントリーのコースが設定され，それ以上の高地は春スキーの客で賑わう．

こうして，バート・ホフガスタインは人口を大幅に上回る8,000ベッドの収容力を誇り，その稼働率は44.5%に達していて地域経済の向上は顕著である．130万人の延宿泊客数の季節変化をみると，1～3月のスキーシーズンに最大のピークを示し，ついで7～9月の夏季がオンシーズンをなす．その平均滞在日数は夏季が14日と長く，スキー客が多い冬季は8日で短縮されてはいるが，日本の温泉地とは比較にならない程に長期の滞在をしている．

宿泊料金も1983年で1泊朝食付最低1,800円から12,000円までであり，延宿泊客数の95%はオーストリア人(45%)とドイツ人(50%)で占められ，彼等は比較的安い宿泊費のもとでスキーや温泉入浴を楽しみ，また温泉保養に時を過ごしているのである．

(3) イタリアのモンテカティーニ

イタリアは日本と同じ火山国であり，各地に温泉が湧出して約200カ所の温泉地が分布する．その中で，トスカーナ地方のモンテカティーニは飲泉を主とした肝臓病治療の温泉地として有名である．フィレンツェとピサの両都市の中間に位置し，太陽道路と呼ばれる高速道路でわずかに30分で到達できる．

15世紀初頭，この温泉地にはすでに3つの温泉浴場が存在していたが，18世紀後半にトスカニー

公国のピエトロ・レオポルド大公が浴場を再建し，飲泉場を設けて生まれ変わり，19世紀に入ってヨーロッパ各国の王侯貴族や作家，俳優など有名人が来湯するようになった．

現在，モンテカティーニには7つの源泉，9つの温泉治療施設がある．源泉はすべて国有であり，主にアルカリ性硫酸塩泉，炭酸泉で，温度は24℃～34℃とぬるい．飲泉利用が主体で，肝臓病，胃腸病，腎臓病などに効果あり，浴用に使われる2つの源泉はリウマチ，皮膚病などに利用されている．肝臓病に特効があるテツッチオの飲泉場は見事な建物であり，塩分濃度の異なる温泉の蛇口が立派な大理石の壁画の前に並んでいる．温泉医の指導のもとに，早朝から多くの湯治客が来訪し，飲泉をしながら談笑にふけっている．

モンテカティーニ温泉医師会の資料によれば，温泉療養のためには15～20日間の滞在が標準とされ，場合によっては年2回の来場も必要であるという．飲泉場は4月から11月までの8カ月間開かれており，夏季が湯治の最盛期をなす．飲泉場入場料金はオンシーズンで12日分が13,700円(1984年)，20日分が18,900円であり，その他に温泉浴やマッサージ，温泉プールでの水泳は1,300円から3,900円で利用できる．

中世の面影を残す町並みには，飲泉場や多くのホテル，ペンションやテニスコート，競馬場，美術館などが緑豊かな公園に接して分布している．そして，長期滞在客のために周辺地域への半日，1日のツアーも数多く用意されている．

モンテカティーニには662軒もの宿泊施設(内426軒，64.3%は部屋貸し民宿)があり，その収容人員は12,600人に達する．延宿泊客数は1950年で63万人，1965年で102万人，1983年で146万人を数えたが，その平均滞在日数はかつての10日程度から5日へと半減している．そして宿泊客の80%強はイタリア人で占められ，特にナポリ，バリ，シチリア島など経済的にも遅れをとってきた南部地方からの客が近年増加しているのである(図2)．とはいえ，外国人の利用もかなりあり(延23万人)，美容やリフレッシュのための温泉利用も重視されつつあって，モテカティーニは新たな保養温泉地としての展開をみている．

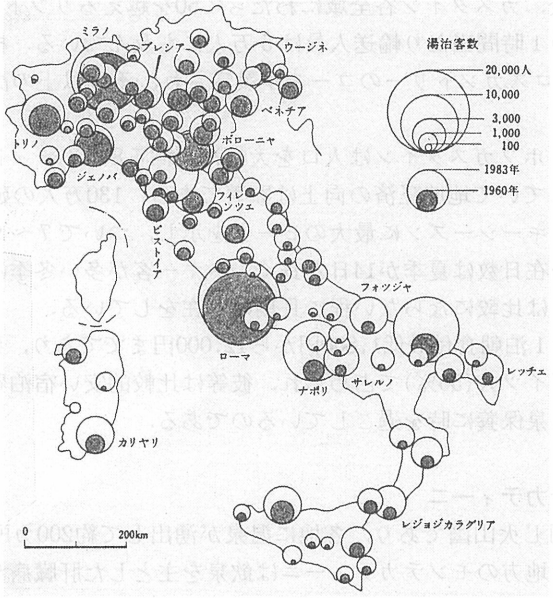

図2　モンテカティーニにおける国内湯治客の居住地
(注)モンテカティーニ観光協会の資料により作成．

3．アメリカ合衆国の温泉地

(1) ホットスプリングス

アメリカ合衆国中南部アーカンソー州のオザーク台地の一角にホットスプリングス国立公園がある．この国立公園は温泉そのものが地名になっており，優れた温泉資源を守るためにアメリカで最初の公的保護地区が指定された地域として知られる．アメリカ西部の山岳地域では，近年一部の人々に温泉の良さが紹介されて，温泉浴槽を備えた宿泊施設や露天風呂が喜ばれている．しかし，ホットスプリングスは豊富な温泉資源と歴史の重みを感じさせる多くの立派な温泉浴場を持ちながら，近くの湖沼地域での郊外レクリエーションが活発で，温泉の利用は停滞を余儀なくされているのである．

この温泉は，かつてインディアンが健康を授けてくれる宝として利用していたが，1800年にフランス人の最初の集落ができ，熱病や中風の療養に使われた．時の大統領トーマス・ジェファーソンは温泉地域の科学調査を命じ，その実態が明らかにされるとともに健康回復のために多くの人々が訪れるようになり，1828年にはホテルが誕生した．1832年，合衆国政府は温泉湧出地帯を保護地区とし，源泉から温泉を引いて温泉浴場が建設された．1856年には7つの温泉浴場が建並び，その後都市計画が実施されて温泉町が整備された．1885年9月～11月の3カ月間に約2万人の患者が温泉治療を受けており，その疾患はリウマチ(40%)，梅毒(31%)が多かった．

個人経営の温泉浴場はビクトリア風，スペイン風のものなど多様な外観を競い，温泉浴場街(Bathhouse Row)を形成していた(図3)．20世紀初頭の入浴料金は21日間コースで10～15ドル，宿泊料金は1週間当り食事付で10～50ドルであった．各種の温泉療養施設の他に，パック室，マッサージ室，美容室，ビリアード室，音楽室なども整備され保養や楽しみの場としても機能していた．この頃になると，ゴルフ，釣り，狩猟，ボート遊びなどの野外レクリエーション．劇場や映画館での娯楽も一般化し，大リーグのキャンプ地ともなって年間15万人もの観光客を数えたという．

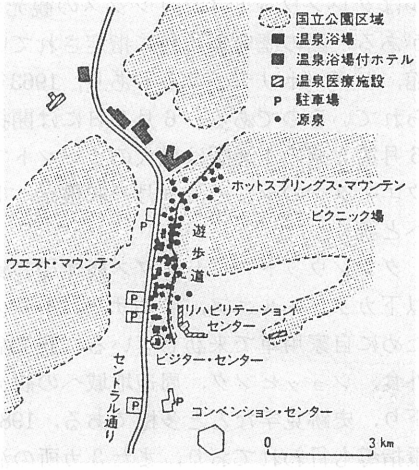

図3　ホットスプリングスの温泉集落
(注)ホットスプリングス国立公園局の資料による．1987年現在．

第2次世界大戦後は一時期傷病兵の保養に利用されて繁栄したが，1960年代に入ると温泉浴場の利用に代わって周辺湖沼地帯での野外レクリエーションが活発となり，温泉浴場は経営難から次第に閉鎖されるに至った．1987年現在，8つの温泉浴場中1つを残して全て閉鎖されてしまった．

有力ホテルには温泉浴槽があり，一流のアーリントンホテルでは1987年4月24日から翌年1月末までの金，土曜日の週末に宿泊する格安パッケージ宿泊券を販売している．2人で2泊3日の宿泊料，温泉入浴料(7～9ドル)，マッサージ料(8～10ドル)に30ドル分の食事付で159ドル(約22,000円)という料金であり，週末に宿泊費が安くなるアメリカならではの料金設定がなされている．

温泉浴場街に接してビジターセンターがあり，レンジャーがいて浴場施設や野外の地熱，温泉現象を見学する無料ツアーを催している．少人数であっても案内をしてくれ，地域理解にプラスするところが大きい．ホットスプリングス国立公園当局は，温泉浴場街(1974年に国立歴史地区に指定)の再建を計画しつつあり，周辺森林地区とも一体化した観光地域を整備しつつあるので，

近い将来には温泉場地区へ観光客を呼び戻すことにもなろう.

(2) グレンウッドスプリングス

アメリカ合衆国西部のロッキー山脈を抱くコロラド州には50カ所近い温泉地があり，その3分の2は40℃以上の高温泉で観光レクリエーションに利用されている．この温泉もウテインディアンの聖なる泉として大切に守られてきた．彼等はこの温泉をヤンパ(Big Medicine)と名づけて優れた狩人，戦士となるための宗教儀式や温泉療養に利用した.

1860年，最初の白人が入植しその後各地から温泉の効能を伝え聞いた人々が来訪して温泉浴場をつくり，洞穴温泉で蒸気浴が行われたりした．1883年にアスペンから来たデベロは温泉の療養的利用に力を注いだ．温泉と土地を買収し，理想的な温泉場“The Spa”の形成を目指して当時世界最大級の野外温泉プール(長さ188m)を開設，温泉浴場を併設してフランスで温泉医学を修めたオランダ人医師の指導のもとにリウマチ，痛風などの温泉治療を行った.

1893年には85万ドルの建築費を投じて200室のデラックスなホテルコロラドがオープンした．ローマのメジチ家の別荘を模した16世紀イタリア風建築であり，この頃になるとロッキー山脈のすばらしい自然景観が紹介され，開通したばかりの鉄道を通じて，さらに20世紀初頭には自動車に乗って多くの観光レクリエーション客が来訪するようになった.

第2次世界大戦後，温泉施設は別会社に引き継がれ，大温泉プールも改修されたが，このプールはグレンウッドスプリングスの観光の目玉であり，夏季の最盛期には1日に3,000人の利用客がある．国の歴史建造物に指定されているホテルコロラドをはじめ，開拓時代を偲ぶ開拓史博物館，ドグ・ホリディの墓もあり，1963年に創立された開拓史協会の手でこれらの歴史的遺産が守られているのである．6月7日には開拓史協会の人々の案内による歴史ツアーが開催され，また6月第3週の1週間は最大のイベントである“イチゴ祭り”が行われ，さらに7月のカントリーウエスタンのショー，9月の収穫祭，トライアスロン競技会，美術展，11月下旬のスキー場開きへと続く.

グレンウッドスプリングス観光局の資料によると，コロラド州内からの観光客が57%を占め，以下カリフォルニア，テキサス，イリノイ州などからの客が多く，若年層，中年層が休暇旅行のために自家用車で来訪している．観光活動については，温泉プール入浴が最も多いが(16.2%)，外食，ショッピング，周辺地域への観光，ミニゴルフ，狩猟，水泳，ハイキング，キャンプ，川下り，史跡見学などと多様である．1986年に始められたアスレチッククラブでは蒸気浴による健康指導も行われており，また3カ所の洞穴温泉では肺疾患，関節炎，皮膚病などの温泉療養も続けられているが，グレンウッドスプリングスでは温泉の利用は，観光レクリエーション形態の1つとして位置づけられるに至っているといえよう.

4．日本の温泉地の現状

日本の温泉地は1990年現在2,300カ所を数え，その延宿泊客数は1億3,000万人に達していて，前年比で500万人増である．まさに温泉ブームが定着した感がある．筆者の試算では，1970年頃ですでに延宿泊客の90%強はいわゆる1泊宿泊の観光，歓楽型の温泉地宿泊客であり，今日ではその比率はさらに増大していると考えられる．一方，環境庁の指定した国民保養温泉地は今日79温泉地区を数えて延宿泊客数の10%強を占めている.

高度経済成長期には男性中心の宴会型歓楽温泉地が盛況を呈したが，オイルショック後の停滞期を脱した現在では，中年婦人層や若年層，老齢層など温泉利用客の年齢の幅が広がって客数が

著しく増え，それだけに志向性もまた多様化するところとなっている．

国民保養温泉地として年間約40万人もの宿泊客を集めている長野県鹿教湯は，高血圧症に効果があるといわれ，古くから湯治客で賑わってきた．そして，1956年に長野県厚生連の経営する温泉療養所が開設され，1959年より県内の農協単位に農民の健康保持を目的とした冬季集団保養が始められた．この保養システムは１週間単位で鹿教湯に滞在し，その間鹿教湯温泉病院での血圧測定，健康講演，その他の指導を受け，各旅館に宿泊して保養をするものであり，低料金制を基本としていて評価される．最盛期の1978年には実数で11,000人，延数で80,000人を集客し地域経済の発展に多大の貢献をしてきた．しかし1989年では実数6,200人，延数40,000人へと半減しており，新たな市場開拓が望まれよう．現在では７泊８日コースが35,400円（交通費別），４泊５日コースが21,200円であり，保養客にとっては格安の料金で長期滞在をすることが可能ある．その他に一般の湯治客も来訪しているし，温泉病院には2,000人の入院患者が各地から来ていて延154,000人を数える．クアハウスも開設され，トレーナーによる文珠堂境内での健康体操にも年間9,000人が参加している．このように，鹿教湯では温泉病院の指導のもとに旅館業者，地域行政体，地域住民が一体となって真の保養温泉地づくりを推進しているのである．

同様に，栃木県板室も国民保養温泉地であるが，いわゆる老齢層の骨休めの場，保養の場として年間30万人もの延宿泊客数を誇っている．宿泊客の来湯目的は湯治が44％，保養が33％，観光が21％（1985年）であり，10回以上来訪したピート客が20％を占める．４泊以上が３分の１，年齢は70代以上と60代が各３分の１，そして無職が３分の１となっており，栃木県内のみならず東京，埼玉，千葉方面へも入湯圏が広がっている（図４）．その背景には，旅館の施設は改善しても宿泊料金を民宿並みの低料金に協定している業者の経営努力と保養温泉地の存在意義についての理解があるのである．

近年，地方行政体による温泉浴場建設が盛んとなっている．いわゆる“ふるさと創生”１億円事業の一環として温泉掘削に関係した事業を行っている市町村は全体の11％にも相当するという．その結果，各地にクアハウスや共同浴場が開設され，地域住民や近隣地域の人々は温泉入浴の恩恵を受けている．露天風呂の新設も多く，既存大観光温泉地でも共同浴場を整備して，その観光資源化を図るようになった．兵庫県城崎では，町内の７つの共同浴場を観光客に解放して外湯７湯巡りができるようになっているし，群馬県草津でも伝統的な大滝の湯や西の河原の大露天風呂を新設した．

日本の大規模観光温泉地のほとんどは，大型旅館が多数の宿泊客を集め，館内にショッピング，娯楽，食事の諸施設を備えていて客を囲い込むので，温泉場が衰退してきたとの指摘があるが，一方では町場に魅力がないので客は外へ出ないとの反論が出ている．札幌の奥座敷といわれた定山渓温泉は，まさにその代表例である．熱海や別府の大温泉観光都市が時を同じくして人工海浜を造成したり，草津，伊香保，下呂，片山津などの有力観光温泉地が町の通りを整備したり，景観の保持を図りつつあることは，当然のことであるとはいえ個々の旅館経営中心から温泉場の環境整備へと地域構成員の目が向けられたものとして評価されよう．

1989年の温泉観光の実態をみると，個人旅行では１泊が54.1％，団体旅行では82.2％に達し，２泊を加えるといずれも90％を越えている．わが国の休暇制度が徐々に変化すれば，温泉地での滞在日数も増えて町場に賑わいが戻るであろうが，現在のように宿泊料金が高額であれば，それも難しいといわざるを得ない．

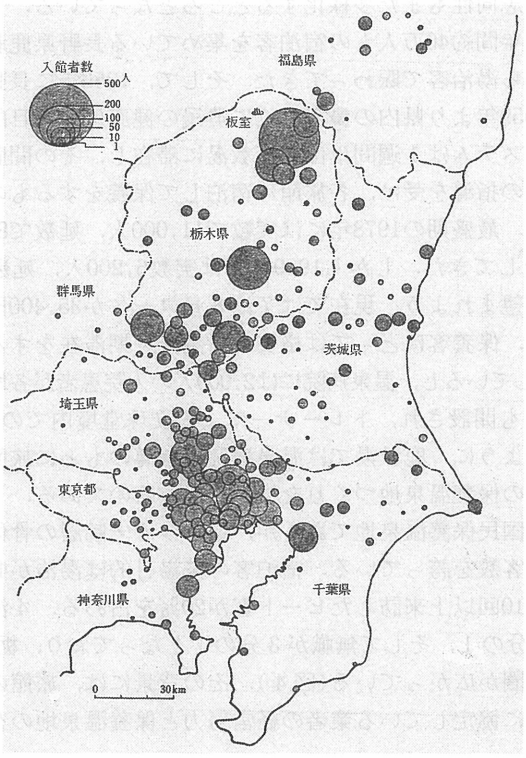

図4　板室温泉館(共同浴場)入館者の居住地
(注)板室温泉館の利用者名簿により作成.
1983年4月1日～1984年1月15日まで.

5．日本の温泉のあり方

日本の温泉地は，それぞれ歴史的にも地域的にも特色を持っている．その地域性を基盤として，国民の温泉地に対する志向性を十分に踏まえた施策が展開されねばならない．温泉観光に関するアンケート調査によると，過去に訪れて最も印象の良かった温泉地は，自然環境が良いが50.4%で最も高く(複数回答)，ついで温泉そのものが良い37.7%，温泉情緒がある28.0%，のんびりくつろげる23.0%などが理由づけに際して上位にランクされていて，旅館の施設，料理，サービスが良いの18.5%を大きくく上回っている．また，温泉地に望む施設としては露天風呂をはじめ，静かな保養公園，散歩道路，和風旅館の町並み，温泉郷土資料館などが強く求められている．

ここに，各温泉地は自然環境をこれ以上破壊しないように十分の配慮をし，温泉情緒を醸成する工夫をして地域社会全体の取り組みにまでもっていくこと，さらに観光客が町場へ出て温泉を楽しみ地域の人々とも触れ会える共同浴場を整備して，温泉地の保養公園化を図ることが今後の温泉地づくりにおいて重要となる．その際，宿泊形態の多様化，宿泊料金の適正化が求められよう．大分県由布院温泉では，官民一体となっての観光振興を推進する中で．“市場(バザール)のある温泉リゾート村構想”を打ち出し，その実現のためには①観光魅力の分散・多様化，②競争をしないで共生する，③環境，景観を最大の観光資源とすることが大切であるとの認識を地域住民が持つに至っている．何の変哲もない田園景観を観光資源化するには，単に景観保存を進めるだけではなく，その意味するところを案内して地域理解へとつなげる配慮が望まれる．

いずれにしても山の１軒宿の秘湯から大温泉観光都市に至るまで，温泉地の性格が異なるので，各温泉地は地域性を踏まえた上で，その環境を保全しつつ温泉を健康保持のために，あるいは楽しみのために活用し，若い人々が定着する活気に満ちた温泉リゾート・コミュニティを形成する必要がある．

文　献

山村順次(1987)：『日本の温泉地—その発達・現状とあり方—』日本温泉協会，257頁
山村順次(1990)：『世界の温泉地—温泉リゾートの発達と現状』大明堂，139頁
山村順次(1991)：温泉観光の実態と志向—第32回「旅と温泉展」のアンケート調査結果—，温泉　59巻3号，16～24頁